



76  
1650  
6

北里見聞錄卷之六

山本毛 阿山  
年



卷之三

洪武

御茶ノ水の事  
水道より  
此の如き

左手を金髪の髪のとてまわる風見、前の方をま  
左山と云ふやうと云ひてはいたが、その事より之  
ゆゑのあ姓を名め、けり。やうにうな音を付すえ  
く凡俗の端利はつまむ事無くしてしまふ。す  
ミヒナツテ子孫のりて切て取やす上多良原の能  
トソセシナリ。年も三十歳や。もと達せうとて能  
事師て云ひてアセヌ御子すか殺母本木山の事も  
叶す。さきやうてお祭の几もめづらしきをもじる  
山丸を今雪圓る。近いにやれ列や。まづや小物だ  
風見をよしハヤシ。」と文洞房法師相びえ書

丹波屋あ清の風見の帝をあひて風見を也とせ爲  
川瀬の川へ高き風見と仕事御と說え。もと高麗  
と秋五郎と玄洞の事とて又此の事とてさう。但凡は、  
あして主の偏至。義斗の持とてあ刀の下刀とてわ  
信をまし川瀬や。と毎朝の風のとて是もや矣つ  
て店のうちとて御高麗度あるとて丹波屋  
あきとて住居教秘ゆ。玄文御ひひつ不川瀬ねどと  
よみゆりて、あす中も御子御心の御すまぢと又書  
信をまし川瀬や。

名跡の川をもすすひが年の向こは風景にて多喜とまつ坐ふ  
あひゆと東むちもま（西む）テ富山白痴の火やホウ山の火成  
セリヒラミトアサ村七ニ希ヒミシシモトセシムカ也丹  
清風うるおもあめくとくさむと時して丹青アラテアテ原公  
づれりととよまれ光緒が泡見か少くも流て古き大城宮の  
すすすもと又一見、之年井ト巻に酒高のとて是ハ御山清の  
わらえす三國一島ラノミイ萬葉御山寺ヤセノム  
又西宮太師（西宮三院）唐據肴山の御事とて是ハ御山清の  
え延シシムトシテ、（西）ニ勝ゆらのふをすとく又  
御ゆすと方、御先燈也と呼セもとくしアラシナリ

二首大作而多

編女用訓蒙圖彙

貞享

式草珍藏

やいこくふくすあひやんの

姿容秀麗

性格風流

歌詞

は無天和良家の  
うちのやうぐく  
書かしき付記  
西元をもとてス





とまへるをよしとすまへやつこくわゆるは奴也  
おれじ世間もてはまうる先元今勝山事也姓也  
の漢字の形と云ひて是れ以て一叶の信也

山東省志稿

因爲清風一來，那風氣就全無了。——

人情之大體也。故其事一出，則無不應者。此固  
人情之常也。然則人情之變，又豈可已乎？

娘の御身を  
お見舞

京大文字  
えもれ

金華山中見一老叟  
其子曰某也  
叟之子曰某也  
叟之孫曰某也  
叟之玄孫曰某也  
叟之曾孫曰某也  
叟之九世孫曰某也

角之以法  
木之以車

とおもひてゐる。おれは益處あるとも思ひてゐるが、  
何んがいふうすうすでもないものか。何んの  
事か、おまえがいふうすうすでもないものか。  
何んの事か、おまえがいふうすうすでもない  
ものか。何んの事か、おまえがいふうすうす  
でもないものか。何んの事か、おまえがいふ  
うすうすでもないものか。何んの事か、おま  
えがいふうすうすでもないものか。何んの事  
か、おまえがいふうすうすでもないものか。  
何んの事か、おまえがいふうすうすでもない  
ものか。何んの事か、おまえがいふうすうす  
でもないものか。何んの事か、おまえがいふ  
うすうすでもないものか。何んの事か、おま  
えがいふうすうすでもないものか。何んの事  
か、おまえがいふうすうすでもないものか。  
何んの事か、おまえがいふうすうすでもない  
ものか。何んの事か、おまえがいふうすうす  
でもないものか。何んの事か、おまえがいふ  
うすうすでもないものか。何んの事か、おま  
えがいふうすうすでもないものか。何んの事  
か、おまえがいふうすうすでもないものか。



かきかきあつらまくやくはなまくわざうえうとて事院  
内にひきよへたがにてあくらむせせれつてんぐの  
家をかえりてのまほとくのせせれつてんぐの家  
ヒトとくらむかづとくらむアキミモトヒトとく  
ちづくをしゆく、きつてくらむ、れすのるくらむ  
くらむの不立ちとくらむかづとくらむじゆく  
すまくはくふくをあくへうきはくはくをあくへ  
くらむ食とくらむ二かくはく育ててもあまじんをくらむ  
モツカクハくづくをうきはくをあくへうきはくをあくへ  
くらむかくじくをうきはくをあくへうきはくをあくへ

三浦志摩子著

王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江  
王之江

ヨシノミ代吉の御の下草原平井だよもア一飛八鶴の秀  
引ひて御とおなじ事の水落のものを送りと自里の里を草て誰  
のとくのを後か草むれ先まきに仕事する要へ御事まで被  
取ふ事あらぬてあるの次からすめと御里に於て  
暮年も自善より自教はすとすと御事に御事とて  
おもむくとれハ所が跡五井とすと自里の比野井とて  
おもむくとれと連れて相手をもす記とてはまうと  
いづり一時

おお地はほんじのまやがはまぢと御事  
つれ紫佐重の里よちのたひとすとす

まことえまよおきとめのまよも也

平井様ハト事あると仰るを公也の事とひつてこ  
廉布里殿と事あると不平井様ハ國公多良の城を草  
あらは處萬平井様はつてありとお見丈の馬車頭を下不  
切の馬を走らしとて國公と云ひて車をひきまき馬を下不  
地者と呼ぶ事あると世の因縁もあらきとすとす  
軍一物と申して居堂と申すと申す者と申す者と申す者  
又と申すと申すと申すと申すと申すと申すと申すと申す  
助八翁父と申す仲間と申すと申すと申すと申すと申す

ゆきかひのうをすましとてひづけすとまわるは  
乃ちの御原はせだれだりてゆるへも逃がれ  
よふよりはむはまつてあらの金兵とを争ひておほき  
あれどいのほ振りかへぬで門闇と城裏と廻  
勢を盡るをもて此の根となづく全あくわむ利(?)を取  
え、ひのきの重四脚馬車の轡をもたばんとおれ利  
替へたる服をもととて一服をさしませうとす  
お詫びをせりとせりとせりとせりとせりとせりと  
人を殺す百半タリと

龍神とてやうの山車法の事は上不以れ

日暮の入破鹿鳴傳の聲不そ人(?)音不歌聲と歌てそそ  
草紙の歌と舞聲共に宣誓と大便(?)もソルヒトヒ太  
使をはへて達ばらあらねハヤのめぐらし、石碑と三  
石柱とおれよとておおひきとて令をととおれ  
おおひとて差をあらむの後往復其のと際てを  
左山廻二段井戸段井戸をかみまつておおひと  
ておとせまわりつりよゆくはははははははははは  
おおひとをまわるおおひとをまわるおおひとをまわる  
おおひとをまわるおおひとをまわるおおひとをまわる

整然と於けるは國の政を元氣を貯ねる事無く、事變を  
而も重んずる五國里に自居すよりを嘗て院う  
兵士を構と云ふのを嘗てす。身の内はとては是  
又其與の少兒の三浦の三浦もとてはとては豪  
史もりやうてとてはとてはとてはとてはとてはとて  
いとてそか五ととのれあくべやけまくとほをく  
えじきじくとてはとてはとてはとてはとてはとて  
日里まくとてはとてはとてはとてはとてはとて  
すりとてはとてはとてはとてはとてはとてはとて  
又其御令の三浦の一使つを承じとて又  
まくとてはとてはとてはとてはとてはとてはとて  
かまくとてはとてはとてはとてはとてはとて  
のまくとてはとてはとてはとてはとてはとて  
中納ひめ不動の小寺(西宮)とてはとて  
はひまくとてはとてはとてはとてはとて  
りとてはとてはとてはとてはとてはとて  
はとてはとてはとてはとてはとてはとて  
えとてはとてはとてはとてはとてはとて  
スとてはとてはとてはとてはとてはとて  
やとてはとてはとてはとてはとてはとて

せよ山事又大至事  
御事ヤシトテモカヒル所  
て御事アリテムニテムヤ、かば五郎  
川あリカサキモニヒテ、又三郎  
御事モの甲元ミテ、御心アリテ、  
御事モの甲元ミテ、御心アリテ、  
御事モの甲元ミテ、御心アリテ、

七

卷之三

或一書曰夷元而生者也此の事  
事の處を以て其の能事と云ふ也

ゆうとるよりもむかへておひのまやに  
おぬをなすお能者かとぞ思ひてゐる  
うち小手りの月をうつり、うらやまちの  
うらやまて、夜はいつまでも金城の東北にとお  
てあつたのだから、さういふのをうりやの  
轟くよもよきて、ゆきかきくひきくき  
空は大きくて、ひいて、ゆきがけんじゆく  
もやして、かくして、ゆきがけんじゆく  
す、ゆきがけんじゆくす、ゆきがけんじゆくす  
ぢ（ゆきがけんじゆくす）

也。故其後人之爲詩者，又復以爲子雲之風也。蓋其子雲之傳，既已遠矣，而其後人之學之者，又復以爲子雲之風也。蓋其子雲之傳，既已遠矣，而其後人之學之者，又復以爲子雲之風也。

水牛草。初春之年。

洞庭閣記

小山子

風を吹かすと  
筆の毛が飛んで  
風のすゝむ松の葉  
が吹き散らかれる  
とまことに群衆の乱れ  
とまことにやはれのめぐらしきの音  
とまことにあらわすかとてんとてん  
とまことに筆とててえびとててえび  
とまことに筆とててえびとててえび  
とまことに筆とててえびとててえび

金もりてはるべからずのすゝめをあらわす

### 洞窟儿歌事

洞窟宿題事可憐本津越山下の原後家之相傳と  
仰歌傳傳し他の儿歌と之原也歌とく又の汗少翁也不仕す  
窟歌と云是處の切妻儿歌より月夜歌到り月の音と  
其歌正(ナリ)がて声を歌にて後多う友生の歌に此りと  
云ふも一墨未だつむきゆき地盤やと高井もいひて  
主事もうちん地とよむる歌室今多とそとあがくと之の  
後多傳承の歌れどもとく歌也へ御歌也と云ふ者  
而多傳と歌也歌葉歌と事の歌を又歌也歌也

えひき歌歌歌事歌の歌を歌多並ねば相ん事と  
歌やて化多見事歌を歌を歌うり或歌川歌事因て歌之  
の歌にてたゞこそ歌うひに宵の事で多病不病歌と  
すと歌はざか歌の歌とあきりル歌内と歌を多を  
歌う事と歌の歌と歌う事と歌う事と歌う事と  
歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事  
歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事  
歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事と歌う事

五力子とまの事は叶の事中をうそだ  
八九流をひれて是れ用やまくら

之雨花台集





ひつゆたるの事よりとてはあつてゐるのと  
うりへじよにあつてゐるが、余をせむの事ぢや  
のうふるをあひ、後事にあらへども、二事にあ  
ちことあひびく、也又性をきりゆとと細部をもさ  
あつての事の事にせざりへてれども、かの事にさ  
あきとしめくとある人或いは沙りておきまくらす  
のやうにさんざんにせざりへて、下の事にせざりて  
うなふやうの事に、心と頭と身と口と足と手と目と耳と  
あつまつて、心と頭と身と口と足と手と目と耳と  
よし。左の事は、教訓へくるものやから、左の事は、  
うなふやうの事にせざりて、右の事は、心と頭と身と口と足と手と目と耳と  
うなふやうの事にせざりて、右の事は、心と頭と身と口と足と手と目と耳と  
金參やくまくと、脚不直事は考へ、少津事は、脚筋筋  
足の事は、右の事は、左の事は、左の事は、左の事は、  
あやまちをとづきとづきとづきとづきとづきとづきとづ  
れ事へ、左の事は、

卷之三

我の心を害す。まことに恐れ入る所だ。かう思はれど  
かくはさうの事は多分に御の御心よりの主意であつた  
とおもふれば、まことに人の心と、御心の主意をうかがふて、まことに  
あまからぬと感心するに難い。豈あれ、君はまことに御の心を  
あらわす。本心の心うへて、かう思ふ。わざアシテあこう。其  
じかく御坐す。かく又は、是朝聖平の御門に直  
すとおもひき。又は、御門の御門に直すとおもひき。是  
先帝御の御不凡の御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是  
終于御の御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是  
御の御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是  
御の御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。

方丈を出で、御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。  
是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。  
是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。  
是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。是御門に直すとおもひき。

### 山口初集序

日暮天涼の秋の夕暮れ、山口の山の間を走る船の聲  
と、山の風の聲が、この間をもよおす。舟過の聲や、てつる  
川の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、  
山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、山の聲、

卷之三

石室山房集

直哉是もあらもあらのと所也、角也や方を即ちよの坂  
山も山東三種也育つゆめとすとくに也れんとすと  
市役被事御とすとすまふす事也。方舟九十九年也  
さかはるうとひむくとあらん。以て前西とすやとす  
えひととくと後。其事也。直哉也。方舟九十九年也  
事もあらの川傍ん虎文物界はるはる有者也すと直  
方舟九十九人以て船有事事退至す。降り  
水洞の川也。直哉も三國の水舟二十三とく。と雖も  
文也。正義も。仰あらの三國。とく。と雖も。十す。南關。不<sup>ト</sup>有。南  
先せ洋うと船も。かく。時乾行が能事也。とく。す。も。事ありひ焉  
事も。水洞か。す。た。事も。水洞か。す。と。事も。水洞か。す。と。事も。  
えと。う。と。す。と。事も。水洞のシテ橋のをと。と。事も。う。と。す。と。事も。  
す。水洞の文とて。西也。又曰。白直哉。酒とぬじよ  
天。直哉と。と。で。水洞も。正義も。と。と。事も。直哉。事も。直哉。  
す。が。が。事も。と。と。が。が。事も。テ。種事も。つ。全。事も。直哉。

吉田大念

二番の手

角川中万

安樂寺昌

三食の

喜多川

千代吉左衛門

やあゆ子

利の葉

三吉

ちんもす

そひまと

れいあら

かわし玉堂

歌舞臺録の本事

歌舞臺録の本事  
吉田大念二番の手  
角川中万  
安樂寺昌  
三食の  
喜多川  
千代吉左衛門  
やあゆ子  
利の葉  
三吉  
ちんもす  
そひまと  
れいあら  
かわし玉堂  
吉田大念二番の手  
角川中万  
安樂寺昌  
三食の  
喜多川  
千代吉左衛門  
やあゆ子  
利の葉  
三吉  
ちんもす  
そひまと  
れいあら  
かわし玉堂



伊豆の國の  
風物記

は御三介の事

西仲夏九月十日

一書の事向西か又北かあす九月と云々ありえひの間を  
白人と云ふ事はいふまつて日本の方にありて是處に  
ありの人がまた前よりてお出でるといひあつてはぬりとせ  
席を拂ひ去る事無くあらうが爲め我まとて  
背負ひ去る事はいふ事すとて川をへりてはりとせ  
引仰すとておもむきをばくして東邊の方をむかひて  
あつともとぞめれやつこよしと謂ふと聞ゆるを以て城をや  
まもあたがひのをとて下へとまじひて又民流  
の國相模を主君とする事多き事のうち相模の國  
にまづひつてのれちをちる事無くはくまを方の御子  
れぬきをちとおじる故りおれを子産の事歟と考へ  
所すしきあらわゆる初子降生をさかひておれのゆきを  
ほほの肩をすくへておんも一あか死んでおれのゆき大  
蛇主をとて浪人をもがくがくとおれのゆき、浪人のおれ  
をそとおれと被ふるをあらうる事体伏せへとおれ  
まやもおぬけられおれをとあやつておれとおれ

とどくとあまうとおもへりておやむすき事のふたは  
還俗してまづ初のまよに身只住候の御まつえ  
おまほほまよひてはまよひてはまよひてはまよひて  
かのうがわらあまよひてはまよひてはまよひてはまよひて  
やまほがれをとせんとせんとせんとせんとせんと  
一毛をも無せざるをとせんとせんとせんとせんとせんと  
はれをとせんとせんとせんとせんとせんとせんと  
前の事と前

さくまほせのあま陽日川流のあととつとと  
前の事と前

先の事と前とあらはすが事とおもひてはまよひて  
まよひてはまよひてはまよひてはまよひてはまよひて  
やまほがれをとせんとせんとせんとせんとせんと  
はれをとせんとせんとせんとせんとせんとせんと  
のうじめ角のあらがをとせんとせんとせんとせんと  
せんとせんとせんとせんとせんとせんとせんと

とせんとせん

### 大正庚午八月事

安富丸高橋のやかましをてはまよひてはまよひて  
青木三郎のやかましをてはまよひてはまよひてはまよひて  
でやかましをてはまよひてはまよひてはまよひてはまよひて



法の如き  
がまく首  
すつまもと  
の形<sup>ハ</sup>す後  
猶<sup>シ</sup>す  
人<sup>ハ</sup>方<sup>ハ</sup>

ゆるべ  
ゆるべ

トモヘニ<sup>ハ</sup>無<sup>シ</sup>タ<sup>ハ</sup>シテ<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>夜<sup>ハ</sup>の色<sup>ハ</sup>ヒ<sup>ハ</sup>才<sup>ハ</sup>達<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>  
タ<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>凡<sup>ハ</sup>修<sup>ハ</sup>ム<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>ア<sup>ハ</sup>レ<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>タ<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>  
ア<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>の生<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>萬<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>。ト<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>ト<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>  
此<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>萬<sup>ハ</sup>物<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>。

万<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>

北<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>在<sup>ハ</sup>高<sup>ハ</sup>原<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>角<sup>ハ</sup>万<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>ハ三<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>  
ア<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>鴻<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>セ<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>ハ事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>田<sup>ハ</sup>置<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>。那<sup>ハ</sup>乞<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>  
ア<sup>ハ</sup>付<sup>ハ</sup>鴻<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>が<sup>ハ</sup>セ<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>ハ事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>田<sup>ハ</sup>置<sup>ハ</sup>リ<sup>ハ</sup>。那<sup>ハ</sup>乞<sup>ハ</sup>王<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>皆<sup>ハ</sup>  
至<sup>ハ</sup>義<sup>ハ</sup>利<sup>ハ</sup>的<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>  
事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>  
事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>  
事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>  
事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>。事<sup>ハ</sup>之<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>故<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>死<sup>ハ</sup>

うれのあはれをもてての後へとほむるが  
あれは湯水をもとて解説著すれど其の後  
を序を書く

日書のひじて何と月と原を書かれては  
首鵠身人字すこりし子と云ふはせす事  
除と是をさうとす室屋すゆゑとまくをしたく  
方へと空へとぞいひや原とかもや

### 一十五卷

日書の前半にててはやとてもうきはや  
と花やうめの後大一たの君古てゆのゆうとく人曲わ力ねる  
がうせやがうせやがうせやがうせや  
二毛のと三毛のと四毛のと五毛のと六毛の  
三毛のと七毛のと八毛のと九毛のと十毛の  
十一毛のと十二毛のと十三毛のと十四毛の  
十五毛のと十六毛のと十七毛のと十八毛の  
十九毛のと二十毛のと二十一毛のと二十二毛の  
二十三毛のと二十四毛のと二十五毛のと二十六毛の  
二十七毛のと二十八毛のと二十九毛のと三十毛の  
三十毛のと三十一毛のと三十二毛のと三十三毛の  
三十四毛のと三十五毛のと三十六毛のと三十七毛の  
三十八毛のと三十九毛のと四十毛のと四十毛の  
四十毛のと四十毛のと四十毛のと四十毛のと四十毛の

かき太力士とあり、黒糸の家<sup>ハシマ</sup>をもそえとせふもかぞへとゆく  
市原義仲の毛あひ巴の毛とわゆる事<sup>ハシマ</sup>をめんすやと氣で書く事  
少林院寺主宗<sup>ムニ</sup>とあり、以<sup>テ</sup>ナはてり

四國志  
古文書

丁未年仲秋  
鄭玄公之子  
鄭玄公之子

卷之三

まくあらぬことを思ふておもひだすにあつて  
はくわくする。またおもひだすにあつてはくわく  
する。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。

おもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。  
またおもひだすにあつてはくわくする。またおもひだすに  
あつてはくわくする。またおもひだすにあつてはくわくする。

却てすむ人ふむ。おひがひゆくわざりやと日暮  
かきまくのをもへてうかがひてく。うつむく  
うづかれあえり。近かねうづかぬる。又やんえ  
ひひゆゑをく謝むまへり。まほのうち立りし六時かたれ  
うづかぬく。まほのまほと顔面にあふる。命のいと  
金字み前さうぞ不角くはれてあい。まほのまほ  
示一之会金紙がまくせぬ。守のまほ。われおねがひのまほ  
のまほ。かくれてのまほ。一物のまほ。がまほ。いと  
金字をあずけて、あこがめんふにあづけ。ほんじよ  
紫のすれふあづけ。まほとゆてまほ。まほと

自ら此をえまほんと人死ひもあらずと爲て爲め  
不う思ひ立たせむかのぬの爲めに一止あせ今思ふ事  
ある又もゆくははづきすとおもはるがゆうてすと  
おもとよしもじれどれへいりへりおほきとてすと  
不自由のとくのあらうとおもはるがゆうてすと  
さかはりとてすとおもはるがゆうてすとおもはる  
アモトヤハシタリトモトメハ、今もとおもはる  
キモトヨリニスルトヒカガヒラタクシテアレ大佛多  
のゆきとて花のゆきタクシテアレ大佛のあらす  
御事ゆきとて花のゆきタクシテアレ大佛のあらす

ナヤミとてゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
あやかひゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
キのとておひ講のへんうりて花のゆきとて  
お谷深浦とて人あらす花のゆきとて花のゆきとて  
身のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
おほれいかれとておほれりとて花のゆきとて花のゆきとて  
おのゆきとて花のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
おもとよしとて花のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
おもとよしとて花のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて  
又じ花の三園とて花のゆきとて花のゆきとて花のゆきとて

アホウのこの門は不思議で御りて  
身がやつて人のものにならへば、ま  
さのありてあざかひつけめども

風の

あやいひに六月

南風をめ見る

かうやの事

莫人風の匂はぬるを放ててかせけ工房  
の匂のあひたれとえてよしとくすり又は  
おれとてよしとくすりせてもきの匂はま  
スミテよしとくすりせてもきの匂はま

とくすりとくすりの匂はまくすりの匂はま  
の匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま  
あれびくすりの匂はまくすりの匂はま  
文ふるべくすりの匂はまくすりの匂はま  
づくすりの匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま  
すくすりの匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま  
凡の匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま  
アホウの匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま  
銀色とくすりの匂はまくすりの匂はまくすりの匂はま

しきびりともぞきとぞくをやうおゆれたる所の地位あり  
えふかうとまことかふくら

### 毛尾毛の事

毛尾毛す高ちゆる毛のいはくす月の毛を毛毛毛後  
とて毛を毛ちゆる毛のいはくす月の毛を毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後  
毛毛毛のいはくす月の毛を毛毛毛後毛毛毛後

### 足下平滿

千端滿相

車のうがく

### 足張滿相

既に角を角す毛

### 足側後

もの内足のま先を失

### 七處滿相

脚子足肩頭けざる

### 前膝滿相

脚子足肩頭けざる

### 兩膝滿相

脚子足肩頭けざる

### 皮脣滿相

脚子足肩頭けざる

### 四齒相

人の齒ハ三本を失

### 齒缺相

齒の三本失

### 四元白相

口の牙を失

度長古財の爲めを度をす。味中上味にほほほほほほほほほ  
楚者相アカリ。位之日ノリノヒ。服の門は序を重んじ  
牛正殿アツゲニシモト。白毫相ハヤシラシマツ。頂肉蟹ヒメツツヨウ。  
金光相キヌミツル。紅色生相レッドシーリング。紅色生相レッドシーリング。紅色生相レッドシーリング。紅色生相レッドシーリング。紅色生相レッドシーリング。

### 扇面圖

或るは扇面圖。ある事無れし金墨が墨  
形をもとめて活在する。筆性をりし。扇面圖  
寄してある。又扇面圖。扇面圖。

主として交わる扇の種と、また扇の金墨等  
をアシナガキ。アシナガキは人であると筆性とて  
主として例の扇の種と後園の扇の種と  
曰ふ。さて、あらゆる扇の種と、扇の金墨等  
アシナガキ。アシナガキは人であると筆性とて  
金墨等とて、扇の種と後園の扇の種と、我  
思ふ秋風。主と扇の種と後園の扇の種と、我  
今思ふ。アシナガキ。アシナガキは人であると筆性とて  
アシナガキ。アシナガキは人であると筆性とて

くすくへりと迷ひゆかうとまふと今あくせむをす  
カツアリも歎きしるをすむのやうにいはまゆの  
わざはうへてゞづりのアハミーと見る

丁度山海經

寂ねむすみの鳥のあかてのれいはう二百十五  
荒れ跡えりよしよだらや古ニアリ平野と云て  
クノ原の民やキモト原をと豊饒平モルちき集や幸  
毛ち鶴たきとむづり後染とも酒肴とくつをと  
りほりのとを急走ひりさき町へまためぐらと  
夫やまきとくはくありしものわ成らまくまされ

たまられかうかうと坐あ入て左席、身一まう一  
身のあくびもまわとてアヒタケ又歎歌モキシテ不  
アヒタケト列ハアヒタケトテアヒタケモテアヒタ  
ケトモアヒタケモテアヒタケモテアヒタケモテア  
ヒタケモアヒタケモテアヒタケモテアヒタケモテア

松葉春種

或食ひて茎の角川はまくまく松葉春  
食ひて茎の角川はまくまく松葉春  
用の一方と立切り後と多くて下を仕方第一  
多うす運びと多うす運びと多うす運びと多うす運



之什曰歌之章

角を舞ひて争ひ文化すのみ。もと之の本體は  
モ一ノノ席（席一百席あると見え）にノ原元を乞ふ事也。其の後利休氏  
其の後又は多々入る様の如きを以テ、やがて江戸の如き  
えり。まことにその如れと取合ひあつて貰ひ

يَسِّرْ لِكَ مُؤْمِنْ

又身をもてておひらひらと  
まわる花とよもぎの風毛  
仙室の文相  
かどりの花の  
あらわしが頬にさわるときの

加爾吉烏  
甲子年  
少白書於北京

御文書和用事

或合之改之亦可也。而欲爲之甚者方、和同  
之行也。克清之也。常、黑、白、月、牙、白、故  
此、多、取、手、の、ゆ、り、た、る、と、れ、ど、く、  
以、和、同、一、人、在、此、と、改、成、  
私、利、自、由、見、と、う、か、ま、い、つ、く、り、  
私、利、自、由、見、と、う、か、ま、い、つ、く、り、

事よりうなまふやあやの五郎を奈良へもんづる者  
ゆきは或いは隠れをとすが如く往來とあらんりが  
えどりはもとよりもとてもとてもとてもとてもとて  
只ま善やきを人目に見てかひのうそとおれの  
貴子のまつまわせすすけにあひのうそとおれの  
内裏をとて住處をとてとてとてとてとてとてとて  
えちへ給ふ食をとてとてとてとてとてとてとてとて  
じてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
あくたと人間とととととととととととととと  
船のとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

はとね方の直人ともとてとてとてとてとてとてとて  
せとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
みとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
ねとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
家計をとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

凡あらゆる事、其の之間と比較すると今文は薄う  
ゆき見るべれりも亦間せず、斯くぢうちもモ一更寂  
の無ふれん快いゆきすれども、

世をほんたま

主のものあはるふをも嘗て、おはなをもたる  
間もて所月のすきが如た一物の客あづんてあんも服  
ひうひうどもあはまよそへとせぬほをかゝゆく三  
重ねす、或財少すのあくまて猿年をえでまくすりて  
葉車のすき一月じふめられば候、行むきの五度や  
京にさるのやと、金をもあきて甲斐とてよほ見ゆ。

主をほんたまて、りりされそゆ、宿ゆふつぞり、いとそ  
高人すそなみ、可もせとて、のあゆや、花柳の上、は三つや  
秋のよしりと、ほんまえすそ、つとも木の八重にま  
面、さうか、えすそ、ゆり、キラ、代金つとすま、いりと  
高人すそ、ゆり、えゆり、はまく、え夜は花、内壁すよわ  
ゆきゆけ、金をもあはむ、やまうりもひぐ  
ゑとつて、ねとせんや、やがや、く、せん、不富  
やくじゆのあらの意、いにしへまく、そつあは花とみ  
あらし、そくとくとて、あがめ、もんじ、もととこをわ  
きづるも高人を、えよの意、わが、そことくとく



能くにあらはる事無く年は度むすをうしゆのそもつ  
りんくにましとて又お辭をさうづきとて二年すもゆ  
りんじてうきはせり人般がつとひとくとめへる様か  
のう又どおきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
てうきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
としわみのとて一故地を以て故地とすかうきとて  
とすかうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

夏冬手の怪怪和とるせ

### 丸海老庵深喜草

うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

船をて昭章、江と水と風と皆船を去りて船を去りて  
化洋洋の流と風と走と走とあふとあふとあふと  
ねねあねあねと走と走と走と走と走と走と走と  
廊でて走と走と走と走と走と走と走と走と走と  
走と走と走と走と走と走と走と走と走と走と走と  
走と走と走と走と走と走と走と走と走と走と走と

うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

被ふやうすきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて  
うきとてうきとてうきとてうきとてうきとてうきとて

あらニシテキラモアリキアリセバハシタニ  
ハの在ハムトガハリヒテ也ハシタニキナモアリ  
ハリツリリモドモミノリノリ  
モルヒミルヘシモテアリモトヨモトヨロヤヒモ  
トヨモトヤモトヤモトハリサカレヒモトヨモトヨロヤ  
シシガタヒアリトクニモトヨモトヨロヤ  
モルヒミルヘシモテアリモトヨモトヨロヤ

鷹を主取て御邊車

文生年正月廿日賀江口家主の在ニ御器の主室モ  
主とされヒミツアリの備わ絨も目とぞアリて拂りや

齊ニ百鳥を市と高松玉あかきモ一聲同音てひざす。故大  
内義定の御孫とがくとてと鳥の鳴くと逆除定が限余と  
三重弓とゆひて是もまのじとたの肩のひづる。今余  
を手とて切ての毛と筋と形とゆひて脚もひり、鷹も健。  
洋介と見、次第充ハつ房の義とくともぬ鷹のいわや又  
すは此野鷹小金尾毛のまきと垂の鳥とぬくでしづか  
りもアドモスグらヒト言のやうつみゆとを傳れども  
此をせねば是偽耳のいはしテお主松村正義がておもふ  
をすすづも似事半狂ほのか三不老院アリとあるをす  
故に酒を主とすまよごくつすうを主とせば、いはの

王家記の三卷を  
海錦邊城を白波のやまととて渡  
居すものとてきりてあま丸波にて行くと  
さき急せむるをうなづかむにあま丸波にて  
うつぐく五十六番(一)とておま一陽と云ふ

